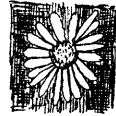


幼児教育における絵画製作



坂元彦太郎

〈1〉

幼児教育において、絵画や製作に関する活動を幼児にもたせることそれ自身は、誰もが自明のこととしている。しかし、何故にそれが必要であり、何をねらってそれをもたせるか、という点については、必ずしもみんなが同じ考えにたっているわけではない。実際の幼稚園・保育所などでおこなわれている活動やその所産が、さまざまなちがいを見せている大きな原因の一つがここにあると考えられる。

そして、こうした混乱を解決しようとするいくつかの言説や、さらに運動が世にある。わたしは、そうしたすべての流派(?)の主張をくわしく知っているとはいえないが、それぞれにその困ってくるもとや、その拠ってたつ根拠があるように感じられる。この

世界でよくある風習なのであろうか、自分の説を強調するあまり他をひきおとすきらいがないではない。こうした他を排斥する部面には納得がいかないが、自分の信じてるところを述べる点には同感を禁じえない、という場面に会う機会が多いことを告白しよう。そのせいもあって、わたしはここに、ひとの言説はあまり引き合いに出さないで、いくつかの問題について、自分の考えていることを端的に述べて見たいと思う。

〈2〉

先ず取り組んで見たいのは、いちばん平凡で、しかし根本的な問題である。絵画製作などを園の生活の中でやらせるのは、人間としてのぞましい性格や行動をできるだけ伸ばすようにするためなのか、いわば「芸術的」な能力をやしないのばすためなのか、という

ことである。大きさにいえば、生活のためにこれらを利用するか、芸術的なものを身につけさせること自体をねらうのか、ということである。

こんな問題をいまさららしく提起する私の常識を疑がわれるかも知れないが、多くの経験と良識を具えた関係者たちが、絵画であろうと、音楽であろうと、はた、自然の観察であろうと、ひとしく人間の形成そのものを目指すものであって、絵画や音楽や科学についての知識や技能を高めることが究極の目的ではない、としていることを、私もよく承知している。

たとえば、絵画製作活動を幼児にやらせるのは、結局は幼児の欲求を解放して自由にその個性を伸長させるためなのだ、という主張——一部からは極端と見られるかも知れないが、それ自身では決してまちがいではない——がある。こうした考えに徹した教師たちは、成人や年長のこともたちの標準にはよらないで、幼児らしい絵を描かせることに専念する。そして、在来の型から解放された、奔放な画面を見てよろこぶ。おとなたちのもっている美の標準がここには通用しないし、まして、美をほんとうには解しない成人たちのおせつかいや、幼児を理解しない成人の干渉をも排しえた、と考える。

さらに進んでは、幼児にこうした活動をさせるのは、その成果が問題ではなく、その活動自身のびのびとやらせ、それが自由でたのしければそれでいいのだ、ということになる。こうした考えは、

数十年前から続いている自由主義的な教育の信念に外ならないので、何もま新しいことではなく、私なども常にそう考えてきたところである。

そして、「この作品をこらんなさい、実に生き生きと、のびのびと自己を表現してはなりませんか、」ということになる。そのとき、例外もあるが、たしかに私もそう感じることが多い。がしかし、その同じ教師に、こどもたちのいくつかの作品を見せてもらっているうちに、私自身がこれはのびのびして幼児らしくていいなと見る眼そのものに、一種の偽りがあることに気付くのである。このことを、文字でいい現わすのはなかなかむずかしいのであるが、こうこういうスタイルの絵は、それを描くときのことどもたちは何ものにもとらわれないでかいている、と判断する傾向がいつの間にかできていたのである。ここにも、排斥してやまないはずの、一種の型がこっそりできていたのである。型ということばを、ありふれた型にはまった、チューリップと人形の絵のような、ステロタイプをいうものとしたら、これを型とよんではいけないであろう。しかし、固定したものではないが、何かしら共通なにおいが線のひき方、形のかき方にあるのを否定できなくなっているのである。

こどもたちは、先生がこれは好ましい、とサジェストすれば、かならず、その方向に自分を流すようになる、といってもいい。むしろ、自己模倣ほうともいってもいいように、自分のほめられた作品のまね

をすることも大いにおこりうるのである。「まね」を排したから、ある種の模倣を知らず知らずの間に押し進めていることにもなる。

「私自身のことをいおう。私などは、フォーヴの運動が盛んなときに若い時を過ごし、絵はいわゆる近代的な絵画でなければならぬように、思いこんでしまっている。と同時に、教育においては、そうした一方に偏した態度はとるべきでない、とこれまた思いこんでいる。だから、一枚の幼児の絵を見てこれもおもしろいな、と思わずいうときには、実は私のうちに積み重ねた審美感がいいと見たのであるが、しかし、教育者としての意識の検閲にかかって、「ほん」とにこれはのびのびと幼児らしくていいな、」と注釈をつけることを忘れないのである。

教師が、いいな、と思ったものが、幼児たちがよろこんでとらわれないでかいたものである、と判断することになるといのは、結局は、やはり、成人のもつ美意識や美の標準を幼児の場合にもあてはめていることになるのではなからうか。ただその美の見方が、さまざまな試練を越えてようやく達せられた近代的なものである、というに過ぎないのではなからうか。ひっくり返していえば、ほんとうに子どもが自分たちの本心を何ものにも縛られずに現わしたものであるものを、外から見わけることができるものであろうか。芸術家たちはできるといい切るかも知れないが、私は私の経験と自己批判によって、そういう場合もあるし、そうでない場合もありう

る、と認めざるをえない。

しかし、ここで立ちとどまることは、一種の自虐であり、ただ破壊の中にとどまることである。私のいいたいことは、むしろ、これから先である。

だからといって、幼児の創造的な自発を重んじるという根本の態度を変える必要がないのは、むしろである。と同時に、つまりは自分の美に対する判断に頼って、子どもたちの活動の価値を見つけている、という事実も自覚しなければならない。

だから、自分たちだけが幼児保育の正しい道を歩いているといったうぬぼれはやめたいものだ。子どもを伸ばす道や姿は、この外にもあるのではなからうか。自分が考えていること以外にも何かもつとこどものためになるものもある、といった謙虚さを身につけることである。

と同時に、どんなにいい抜けて見ても、自分の見る眼がものをいうのであるから、その眼を育て、くもりのないようにすることに努める外はない。結局は、教師は自分の型を押し付けていることになるであろうが、その押しつけ方なり、その型なりが、固定的でない弾力性をもったものであることがのぞましいのであろう。

〈3〉

その考えを少しひろめれば、幼児の造形活動は、必らずしもその

欲求を解放して自己を自由に発現する方面だけではなしに、もっとさまざまな方面があつていいはずである。といへば、いま、「美術教育界」で大はやりのデザイン教育が幼児教育をも風びするきざしがないとはいへまい。デザインを強いて定義をすれば、「なにかの目的をもつて、計画的に造形する」ことであろう。いろいろな理由から、そのうちでも特に、前節に述べたような、自分の感じを何ものにもしづられないで表現する、といった自由主義的な造形理論に對する、一つの反動として、近來特に盛んになってきている、といえよう。小・中学校における、このごろのすさまじい流行は、きっと今度もまた幼稚園をもまきこんでしまふにちがいない、と私は観測している。

この場合もまた、個々の末節はとにかく、こういう面が人形の造形活動のうちの重要な柱であり、幼児の場合でも、幼児にとつてふさわしい形ではあるが、やはりこれにつながるものをもっている、と私は見ている。

むろん、おとなや年長のこともたちと同じような程度や形式の、「目的」やら「計画」が幼児にあらうはずはないが、幼児の造形活動にも、幼児なりの目的や計画がありうるし、大いにあつていいはずである。幼児の場合、その目的や計画が、外から、ことに教師の指導や暗示によって与えられることも多いであろう。また、純粹な美術的な意欲からではなく、実際のな具体生活の姿に應じてうまれ

たものである場合が多いであろう。

今少しこの方面については具体的な例をあげた方がいいであろう。みんなで動物のまねをしておどつて遊ぶために、うさぎやくまの面をつくることもあらう、友だちの誕生日のキャラメルをいれる箱をつくり、それに絵をかく、といったこともあらう。さらに、より純粋に、色をさまざまにならべていわば模様をかくてそれを楽しむということもあらう。

これらは、前節に述べ、幼児本来のものと考えられている「自由表現」のように、抑えつけられた欲求を解放したり、自分の気持ちをそのままにさらけ出したりすることと同じことではない。むしろ、そういった自由表現を制限し、意識的に「他なる者」の制約の中に入ることを意味している。デザイン論者の中には、デザインこそ、真の自己表現だと抗議する人があつたであろうが、少なくとも、ある程度の「他なるもの」の制約の中においてのことであることを認めねばなるまい。

こうした、ことも自身から出た目的ないしは計画もあらうし、半ば以上教師によってサジェストされた目的や計画の場合もあらう。また、具体的な生活の実用的といつてもいいような要求から出てくる場合もあらうし、裝飾的といつてもいいような目的と計画にもとづく場合もあらう。幼児のことであるから、こうした区別も実ははつきりとしたものではなく、重なり合つていたり混合したりしてい

るのが普通であろう。

これらとならんで、さまざまな造形材料それ自身によるしぜんな制限もある。たとえば、砂場の砂に接したら、その砂のもっている性質と、海岸における砂などの連想から山をつくったり、みぞをつくったりするようになるであろう。粘土でつくるときは、やはり粘土でつくられるようなものを、粘土でつくられるようなふうにつくることになるのが、しぜんである。

これらも、自己表現に対する、外からの規制である、といっているであろう。いわゆるデザインといわれるものからは離れているかも知れないが、こどもの気持の自由な発現に対しては、やはり一種の規制を与えるものであって、デザインに近い性質をもっているといわねばなるまい。

〈4〉

このように考えてみると、幼児ののぞましい造形活動には、二つの極があり、その間にさまざまな種類のものがならんでいる、といえるであろう。一方の極には、何ものにも制限されずに自分をそのままにさらけ出すようなもの、自分のしたいことをしたいほうだいにしているような種類のものがある。他方の極に、勝手な自由をほしいままにしているのではなく、何かの目的をもち、何かの計画があって、それに従って造形するといった種類、何らかの外的な力に

よって自己表現が規制されているといったものがある。

しかし、よく考えてみると、何ものにもしづられないで自己を解放しているときでも、たとえば、その用紙であるとか、顔料であるとか、用具であるとかによって制約されたり、誘発されたりしていることも見逃せないことである。もっと広くみれば、先生を中心とする幼児をとりまいてる人たちが環境が、幼児に自由に自己表現ができるようにしつらえてなければならぬ。こうした、外的な圧迫を取り除くことができるような、外的な条件がととのっているじて、こうした活動が可能なのである。

だから、一方の極にあると考えられるような活動にも、実はそれを制約している外的な条件が全く存しないというのではなくて、あまり抵抗を感じないで自己を表現できるような外的条件があるわけである。また、他方の極にある極端なデザインの活動を考えてみても、そこに幼児の自己表現がないわけではない。その制限の中に幼児はよるこんで没入することができることが多い。

たとえば、大きな紙面に、パス類のような非常にやわらかい塗料や、水えのぐをふくんだやわらかい筆のように、自由に腕やからだを動かすことのできるような条件をしつらえれば、自由なのびのびした線をかき一つの条件ができる。しかし、その色のおもしろさや、くつきりとあとのつく楽しさに気をとられて、色をならべたり組み合わせたりしていれば、デザインの傾向をもってくる。このよ

うに、今、極としてわけた二つの種類も、実際には、区別の非常に出来にくい一体的な姿で与えられることが多い。

したがって、自己表現をもつばらにすること、外的制限にしたがうこととは、むしろ、同一の造形活動を形成している要素である、と考える方が実際には近いであろう。一方の要素が、他の要素にまさって強く表面に出ている場合に、一方の極に近い、ということになる。と同時に、この要素を分析して見てその性格のちがいはつきり自覚して、適切に対処することが必要だということになるが、端的にいえば、それぞれの極の差異をはつきり意識してそれを活かすように努力するのがいい、と私は思っている。両方を含んでいるから、中途はんばでいい、とは、私は考えない。

しかし、よくあるような、小さな画用紙にクレヨンでかいた、チューリップと人形の絵を、どう考えたらいいかは、やはり問題としてのこる。こういうのは全くつまらない、型にはまったものだと、唾を吐きすてるように軽べつする人たちもいる。しかしながら、実際は、こういう絵をかく子どもの方がはるかに多いことも事実である。

こういう絵は、ほんとうのこどもの内面が露出されてないつまらないものだとし、こどもたちの抑えられている欲求を自由にほばしらせるのが、絵の使命だ、としている人たちがいる。そういう論理を押しつめていくと、何か外の方面でそのこの欲求が満たされてい

るような子には、いい絵をかくチャンスが少ない、ということになって、教育の中の造形の場合としてはおかしなことになってしまう。

ああいう型にはまった絵をかいているこどもの中には、安定した感情と、みだされた欲求をもっている幸福な幼児もいるにちがいない。自由な自己発現という角度からだけで、ああした絵の無価値がいえるであろうか。結局、ああした絵がつまらないのは、近代的な絵画美の標準から見れば低いものであるからではなからうか。ある教師にできている眼が、つまらないと見るから、その絵が死んでいるように見えるのではなからうか。そう見ることを私は決してまちがっているとは思わない。

しかし、それでああした絵をかくこどもたちを軽べつしていいであろうか。もっと外の仕方で自己を十二分に発現している際に、必ずしも絵画製作によらなくてもいいのではなからうか。と思うと同時に、造形の世界の中でも、少しづつでも眼が開けるようにみちびいてやる工夫を怠ってはならない。さまざまな経験で豊かにもたせたり、用具や顔料を変えて見たり、適当な賞讃で模ほうにみちびいたり、平凡な努力をしてやることも大切であろう。

こうした、あまりりきみかえらないで、じっくりやらせるような造形活動が、年長の少年たちの教育の中における「読書算」のような基礎的なスキルの習練と似た役目を果たすことを、語りたかったが、紙面が尽きてしまった。